末黒野

すぐろの

11月号
（通巻927号）

末黒野　令和五年十一月五日発行　第七十八巻第十一号（通巻九二七号）

湖尻

森清堯

捨て網や浜昼顔の拠りどころ

鉄線花他には頼らず決むべしと

日の盛り足をだらりと鴉降り

遠花火奥意にわづか残るもの

ともあれと箸を差しけり冷奴

みんみんや産土の杜ふくらませ

夏惜しむ阿夫利嶺の雲くづれ初め

初秋や湖尻の葦の風の音

眼の乾き喉の渇きや広島忌

枝豆や買物籠へ真つ先に

八月や気の剥落のはじまりぬ

底紅の皺みて包むひと日かな

土用干

岡野里子

力車にて四万六千日の寺
隠沼の昼の暗さよ牛蛙
天仰ぐ落蟬の足広島忌
懇ろに開く昔日土用干
涼しさや岩間を滑る水の綾
水草の花や流れの堰となり
せせらぎは鯉の縄張り夏旺ん
日を返す水田に隣る青田かな
歓声のやがて叫声舟遊び
町川の女船頭涼み舟
一湾の百灯の影風涼し
行合ひの空や亭午の酔芙蓉

瑞声

踊花

黒滝志麻子（顧問）

行くほどに森のしめりや花うばら
さはさはと稲の葉ずれや涼を呼び
声掛くる返事のをさな心太
浮雲や遊びごころの踊花
小流れに添うて歩きぬあめんぼう
舟虫や真昼うつろな漁師町
雨雲のはびこる窓辺アマリリス
夕菅に潮吹き上ぐる風強し

甲矢集

夏座敷

森清信子

ゴールキック決める少年雲の峰
日盛りや沖の小島の揺らぐかに
境内に流れ一筋糸とんぼ
青空をくすぐつてをり今年竹
夏空やつけこむ隙のなき青さ
渓流の砂地へ浸す素足かな
舟盛りの尾を高くあげ
薄れたる近所付合ひ祭笛
日照雨後の秋蟬殊に競ひけり
日と風と街騒乗せて秋桜

滑翔の鳶

石黒興平

滑翔の鳶梅雨雲を払ひたる
半鐘の中の蜘蛛の囲坊軒端
心倣しか憂き顔に見ゆ黒日傘
料理屋の水槽鰺の元気なる
優曇華や社殿の奥の薄明り
みんみんや床屋の主人寡黙にて
搦やかに密かに烏瓜の花
陸上部避暑地の坂を意気高く
絶え間なく水をくすぐり水澄し
甲冑めく日焼防止の母子かな

カムイ伝

太田良一

石窟の特攻艇や蚊の唸り
虫干や全十巻のカムイ伝
打水やドイツ生まれの老神父
難聴の耳や残暑の恨み言
終戦日一粒とても残すまじ
さざなみは星の会話や星の恋
落城のいくさ話やつくつくし
常温と決めて酒飲む月夜かな
耳奥に来てゐる秋や風の音
露座仏の肩に休める蜻蛉かな

腓返り

小田嶋野笛

山荘は駅より五分青葉闇
甘味処の三和土へ匂ひ茹小豆
静かなる蛍の恋や闇深め
冷房の腓返りや闇の中
好き嫌ひ何一つ無く夏に負け
噴水の止まるや戻る空の色
脱稿の首へ膏薬缶ビール
碁敵の藍の甚平子持縞
焼茄子の黒焦げの中ひすい色
惑ひ咲く一花の香り夜の薄暑

乙矢集

配列は音順、月毎の循環

明易し　今村千年

朝まだき日のきらきらと大暑かな
脱け出せし猫待つひと夜明易し
桃剥くやふたりの朝餉賑やかに
杖ついて老いの歩幅の墓参
稲稔る里はこぞりて重くなる
蜻蛉追ふ園児の帰り遅々として
おほかたはセールス電話ゐのこづち

八月十五日　岡田史女

街中を洗ひ切つたる雷雨かな
狂ひだす思考回路や日雷
一本の煙草を供ふ墓参
盆過ぎの茶房や男二人のみ
また一つ年寄る八月十五日
ひと雨の過ぎたるあとや虫の声
虫鳴くや夜の帳のその奥に

花すすき　高木邦雄

花火果つ湖面を覆ふ黙の闇
玫瑰の汀や沖の利尻富士
初秋の空を流るる雲白し
秋落暉球児ひたすらバット振り
潮の香の岬の小径花すすき
晩鐘の渡る稲田や一つ星
川風の瀬音はやくも秋の声

冷奴　池乗恵美子

遊星のひとつに生れ夕端居
いきどほりを収め一献冷奴
一幅の滝の飛沫や夏座敷
別腹へ消ゆる氷菓やきりなくて
下町は抜け道多し祭笛
天金の薄れし日記紙魚走る
向日葵や明日のしあはせ疑はず

油照　大川暉美

川底に四肢の影張るあめんぼう
水打つや草木も我も甦り
南風に踊る靴下五本指
鳥声を抱く山道青葉風
海風に混じる匂ひや浜万年青
働かぬ前頭葉や油照
結界を風に吹かれて秋茜

稲の花　長尾タイ

望郷や旧家の土間の風涼し
三輪車南天の花こぼしけり
凸凹の土間の乾きや早梅雨
田水沸く卒寿の姉の長電話
千枚田風さはさはと稲の花
苦瓜や虚空にすがる蔓の先
八十路過ぐ兄弟姉妹門火焚く

秋の色　池谷鹿次

初秋や楠の葉ゆらす風の音
枝豆の青鮮やかに茹であがり
松の上別れ鴉の鳴き響む
陽の匂ひ風の匂ひや秋めきぬ
大山へ千切れ雲とぶ秋の色
蒲の穂や山影覆ふ濁り池
野島崎高きうねりの土用波

青炎集

森清　堯選

横浜　山咲和雄

雲海を従へり木曽駒ヶ岳
飛行機雲の突き刺すやうや雲の峰
短夜や死神様と押し問答
老鶯や宿のテラスのオムライス
晴天下晴雨兼用黒日傘
晴天にまさかの出会ひ日雷

横浜　小沼ゑみ子

路地裏の蚯蚓くねくね何処へか
玩具箱広げしままや夏の午后
夏のれん久しき友へ長電話
兄弟の挨拶上手夏休み
風握り風を放して盆踊
諭吉翁の遺訓を読みぬ秋灯下

大網白里　岡井マスミ

牧場に雲の峰立つ左千夫の忌
炎昼や海を目指せる路線バス
秋立つや耳澄ましゆく畷道
子と父と連れ立ち来よと苧殻焚く
初生りの無花果もぐや乳噴けり
返信を一日延ばし流れ星

横浜　梅津まり子

出目金の溜息の泡ティータイム
揺るる影に跳びつく猫やトマト畑
温もりの手の思ひ出や遠花火
大声を出す一匹や今朝の蟬
歌舞伎座や一列はみな紗の着物
口ゆがめ真似て踊るや異国人

横浜　山口登

切先を空へ構へて青薄
駆け出せる子を追ふ母や汗みどろ
秋立つや胸のボタンを一つ止め
枝豆の山盛り崩すジョッキかな
車座に西瓜喰みをり種散らし
間引き菜にコーンスープの朝餉かな

相模原　板谷俊武

金魚鉢の仕切る待合ひ理髪店
雷鳴や雲の黒白鬩ぎ合ひ
閃光に握る拳やはたた神
梅雨明や大物洗ふ心組み
午後の九時鳴き足らぬかに蟬の声
毛氈苔に搦め捕らるる蜻蛉かな

横浜　布施由岐子

青臭き熱れ巻き上げ草刈機
ごきぶりの末路を見ずに寝られるか
西の窓半分塞ぎ凌ぐ夏
干し物の絶えし隣家を訪ふ猛暑
もつと伸びよ今季初なる雲の峰
炎熱の街や行き交ふ人の黙

横浜　宮元陽子

風鈴市の飛び交ふ説南部江戸
炎昼や灰暗き舎の飛天の図
炎天や蹲る人添ふ小犬
風鈴や風の誘ふ谷戸の家
ポンポンと打てば答ふる西瓜かな
秋暑し鏡の中の怒り顔

横浜　小野弘正

老人のつどふ駄菓子屋扇風機
復活の祭自づと同期会
花藻群るる忍野八海人の波
夏草の隠してをりぬ古塔婆
艇長の鮑捌くや酢味噌和へ
消防の車庫の空つぽ脂照

横浜　梅田武

沁み沁みと余生に沁むる新茶かな
遠き日や憲法熱く夏期講座
句ごころの根刮ぎ失する炎暑かな
百日草筋金入りの強さかな
一気なるあとの吐息や生ビール
炎昼の天と戦の外出かな

耕土集

岡野里子選

星今宵介護ホームに撓む笹　横浜　喜田　君江

西瓜売り三浦の風を携へて

猫じやらし子猫の眼らんらんと
銀漢や天寿全うしたる友
不機嫌も鏡に映る残暑かな

北壁よりいざ攻めむかなかき氷　文京　大曲ゆき枝

為すことを為し落蟬の不敵かな

翅かかげ野辺の送りや蟻の列

竹林より出でて青田へ風わたる
敗戦忌我が暑がりは祖母譲り

熱き茶に客もてなせり暑気払　横浜　毛利　直子

猛暑日や見知らぬ人に声をかけ
炎天や上野の森の絵画展
祈り込め千羽鶴折る原爆忌
無宗教の友へ初物盆供養

長袖の出番は遠き極暑かな　横浜　片岡登志枝

水筒の並ぶ公園子らの夏

小振りなる今年の花や妣の蘭
いんげんやくたりと煮えて夫の膳
盆踊やぐら太鼓の鎮魂歌

テレビ見る半が仕事か夕端居　横浜　小長谷　紘

日の暮れやまだ灼け残るボンネット

でで虫の眼玉ゆるりと空に向け
酒よりは麦酒が先と勧められ
引き時を考へて居り終戦日

炎天や高層ビルに影のなく　横浜　丸山佐伎子

行先は雲の峰なり丘の道

ひらひらと落とせる影や黒揚羽
蟬時雨孫の集ひて囲む卓
子等群るる園庭の隅蟻の国

早朝の玄関前や蟬の穴　横浜　村田　敦子

夏草の抜かざるままの芝生かな
土用鰻生れ月とて祝ひ膳
銀ぶらや片蔭探す交叉点

向日葵や陽気な弟へ枕花

蚊帳解きて暖簾に仕立直しかな　横浜　佐々木澄子

夏休み国際平和語る孫

花茣蓙に何呟くや夢の中
片蔭や犬の選びぬ散歩路
滝飛沫避けて合羽をナイアガラ

山車の上太鼓打つ子の顔まつ赤　横浜　吉川　俊子

親の手を放して茅の輪くぐりかな

祇園会や人人人の中の我

街路樹の木暮に屯バスの客
啄木鳥の倒木掘るや穴三つ

天城越え峠の宿のジキタリス　横浜　廣部　尚美

体調の優れぬ日々の炎暑かな
空色の靴と甚平三才児
夏雲と水田の続く車窓かな
小流れの残暑の水に手を浸し

洗濯物干すにも欲しとサングラス　横須賀　小島　澄子

蜜豆のその食感を愛すかな

ともかくもつなぐ命や冷さうめん

遠雷やミステリー本読みさして
八月や平和の本を我に課す
故郷や妣の浮輪と茶の水着　横浜　吉田千惠子

沖縄や白砂と青き夏の海
夏日中湘南電車よぎる風

炎天のドローンの調査屋根修理

酷暑中庭師飲み干すボトル水

二人の餉海鞘をつまみのすすむ酒　横浜　三浦千惠子

神官の後に続きて茅の輪かな
夕刻に届く荷物や夏野菜
せみ鳴くやシーツの皺を叩き干す
隣家の鯖焼く匂ひ夕ぐれて

万緑や子どもは声を言葉とす　横須賀　森　由佳

小太鼓の途切れ途切れや宵祭
山深く母の住み居り梅雨の星
夾竹桃に声あり吾にありやなし
梅雨明けや箸に微かな漆の香